

第63回 小中高校生の吃音のつどい(Enjoy music!)

6月22日(日)、千代田区立千代田小学校ことばの教室及び音楽室にて、ミニコンサート・合唱のつどいを行いました。小学生14名、中学生4名、高校生6名、兄弟姉妹6名、ご両親28名、スタッフ47名の計105名が参加。賑やかで、多くの笑顔が見られて、和気あいあいとした温かい会になったと思います。ミニコンサートでは、参加者の子供達から、大人のプロの方まで素敵な演奏をしていただきました。とても心地良い気持ちになり、音楽に身を委ね、心で音を感じる素晴らしさを実感できたのではないのでしょうか。「次は、僕も演奏したい!」と言ってくれた子がいて、演奏を聴く事で刺激を受けて、挑戦してみたいと思ってくれた事が、とても嬉しかったです。合唱では、普段学校などで気持ち良く歌えず、歌う事が好きではなくなっている人も、今回のつどいで、大きな声で歌う喜び、みんなで音を合わせる楽しさ、音楽に触れて心を開放する気持ち良さを感じる事が出来たと思います。

閉会式の一人一言では、吃音についての話し合いが、有意義なものであったとの言葉をたくさん頂きました。僕達スタッフの苦しんだ経験が、子供達の役に立つのを感じると、苦しんだ経験も嫌な思いだけで終わらず、本当は必要なものだったのではないかと思う事が出来ます。また、吃音があるからと下を向いて生きていく姿を、子供達に見せたくないという思いが、これからの僕達の「苦しくても、精一杯生きてやる!」という力になりました。そんな姿を見て何かを感じてもらえる事が、双方にとっての、つどいの良さだと実感しました。

最後に、音楽の力を借りて生まれた一体感は、つどいの絆を表している様で、本当に良い場所だと思えました。吃音を持つ人が、僕と同じ様に、つどいに救われたと感じてもらえたら嬉しいです。そのためにも、つどいという場所を大切に守り続けていき、子供達が、将来スタッフになって活躍したいと思ってくれるような、素敵な場所にしたいと感じたことが、今回リーダーをして得た、最大の収穫です。(リーダー:山口直明貴、土器菌朋子、松木佳奈子)

小2女子 ピアノ「猫ふんじゃった」

中3女子 ピアノ ブルグミュラー「素直な心」

中2女子 ピアノ ショパン「雨だれ」

中2男子 ピアノ グラナドス「アンダルルーサ」

塩瀬玲子(講師) ピアノ シューマン「子供の情景から数曲」

松木佳奈子 トランペット 「ハイドン トランペット協奏曲第二楽章、第三楽章」

松本直大 ギター アンディマッキー「ドリフティングDrifting」

黒澤大樹 ギター&ボーカル 「ハナミズキ」

中林尚子(スタッフ中林涼のお母さん) フルート&塩瀬玲子 ピアノ 「プーランクのフルートソナタ」

合唱「上を向いて歩こう」、ZARD「負けないで」

伴奏 中2男子(トロンボーン)、松木佳奈子(トランペット)、嶋田聖子(チューバ)、小林桃子(サクソ)

U. Nさん(小3男子のお母さん)

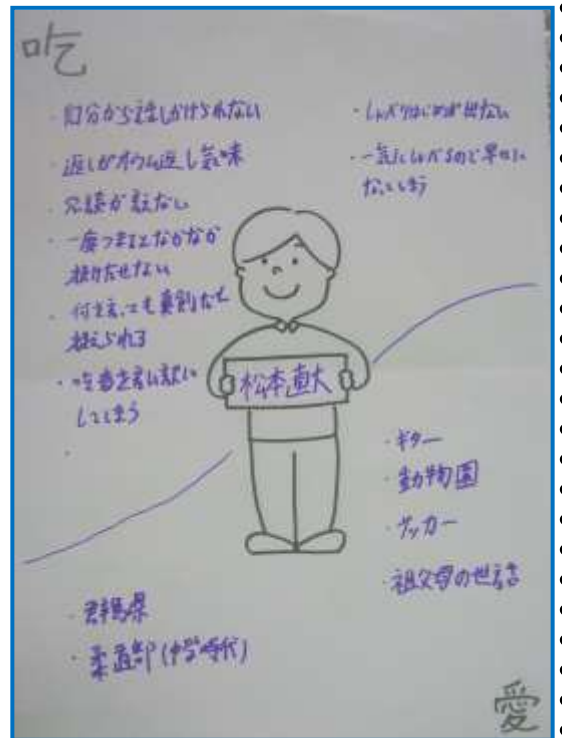
大変お世話になりました。濃い時間を過ごすことが出来、大変充実しておりました。

感想発表の際にも話しましたが、Yさん(朝日新聞「強敵キッツオー」連載男子のお母さん)にずっと誘って頂いていました。ただ、自分の中で躊躇いや戸惑いがあり、なかなか参加することが出来ませんでした。それは、まだ息子の吃音をどこかで受け入れ難く、治ると信じていたこと。息子が明るく、不自由していないと、勝手に解釈していたこと。これが参加しなかった理由だと思います。

参加してみて、皆さんの姿、お話を聞き、もう一度息子と真正面から話してみようと思いました。そして、

これが彼の本音なんだと思います。これから先、まだまだどうなるか分かりませんが吃音をオープンにして苦しい時にはソツと手を差しのべてあげたいと思います。ありがとうございました。

英検の話を詳しくすると、『お守り(英語面接で、もし声が出て来なければ、これを見せて乗り切ろう) ↓』を見て、みんなが写真撮っていい？と興味を示してくれたこともとても良かったです。



そんな私に転機が訪れたのは大学 3 年の時です。「小口君はもっと自分を出した方が良いよ。」自分以外の吃音者と初めて触れ合った時、吃音をカミングアウトすることをそんな風に勧められました。そんな事

今まで考えられませんでした。勇気を振り絞ってカミングアウトしてみると、これまで吃音を隠すことに費やしていた労力が馬鹿らしくなるほど、周囲はすんなりと受け入れてくれました。「自分を出すというのはこういうことか」その時、納得しました。中学の内からカミングアウトしておけばどんなに良かったかと、今更ながら後悔しています。

そして親元を離れ、社会生活を送るようになった今、大人になるにつれ見える世界が広がったからなのかもしれませんが、吃音がちっぽけな悩みに思えるようにもなりました。とは言え、言いたいことをなかなか言えないのは今でも辛いです。でも、初対面の方には必ず「言葉につかえます」と断りを入れてから話すようにしていますし、どもることを恐れずに、伝えたいことを話しています。仕事仲間との飲みで「小口君は確かに口は重いんだけど、こんなに頑張っていて、立派だね」と褒めてもらえた時は、とても嬉しかったです。

長々と話しましたが、皆さんに一番伝えたいことは、吃音だからと、自分を悲観して、自分の殻に籠らないで欲しいということです。私の中学時代の反省でもあります。吃音であることを隠さず、恥ずかしがらずに、明るく前向きに自分を表現することが、吃音を持ちながらも人生を楽しむ最大の秘訣だと私は思います。

Y. N さん（立川市けやき台小学校ことばの教室教師、スタッフ）

高校生になった教え子のDくんと一緒に参加しました。Dくんとは、彼が小学校3年生の時に、私が勤務することばの教室に来室して以来の付き合いです。小学校卒業まで週1回通ってきて、卒業後は、転勤した私の職場まで、時々自転車飛ばして会いに来てくれました。今年、高校生になったDくん、地元の中学から離れ、一歩踏み出し、新たな友人関係を作っていく今、言葉を気にせず関係を結べる場が必要に思い、誘って参加しました。

当日は、午前中は、歌を歌ったり、音楽を聴いたりして過ごしました。いろいろな世代の人達が、ごっちゃ！という感じでスタート。私もDくんも実は歌は嫌いじゃない、けれど、ちょっと落ち着かない。でも、声を上げて歌ったり、スタッフの皆さんの誠実な進行に触れたりするうちに、次第にその空気になじんでいきました。

午後の懇談会。Dくんは、高校生のグループ。離れる時、ちょっと不安そうにしている、保護者代行の私も、大丈夫かなあ、と心配になりましたが、大くんを気遣い昼食中に声をかけてくれたスタッフさんを信頼して、私は保護者グループに参加しました。保護者の方、吃音のあるスタッフさんのお話を伺いながら、20数年間、ことばの教室で出会った多くの子供他達や保護者の顔が浮かんできました。思いは同じなのですね。懇談が終わった保護者の皆さんが、エネルギーを得て、お顔が柔らかになられたように思いました。

心配だったDくん。「話すの苦手だけど、結構話せましたよ。いろいろ話しやすく聞いてくれたから」と言っていました。Dくんの心に、ぽっ・・と灯りがついたかな。つどいの皆さん、ありがとう！！

山本^{あたる} 当（スタッフ、高校生G担当）

今回、初めて参加しました。つどいの日は、落ち着かずにあちこちウロウロしてしまったことや、周りを見せずに、指示待ち人間になってしまったことが悔しかったです。

ただ、それでも合唱やミニコンサートで自然と笑顔になれたり、他のスタッフさんと会話していく内に気持ちを切り換えることが出来ました。特に、小さな子供達が椅子取りゲームを楽しんでいる時は、ホントに癒されました。みんなが笑って楽しんで、吃音を気にせずに活動が出来るなんて、なんていいのだろう。この人達は皆、吃音を知っている。人と接する事に、安全がある。

いつも、見えないストレスに闘っていた自分が、何も装備せずに素の自分を出せることが何より嬉しかったです。みんながいるんだ。僕は1人じゃないんだと、強く思いました。それと、歳も近かったので自然とアクティブになれました。

高校生グループを担当しました。今まで、吃音をもつ高校生とお会いしたこともなかったので、かなり緊張しました。高校生と吃音について語っていると、なんだか僕も高校生に戻って学ランを着ている感覚になりました。まるでタイムスリップしてどこかの教室で、吃音は大変だよな！と、愚痴る感覚になって、相手の高校生が同い年のように感じて、僕は少し懐かしく感じました。

黒澤 大樹(国立障害者リハビリテーションセンター学院 言語聴覚学科1年、スタッフ ご両親 G 担当)

今回、国リハから10人の同級生を連れて参加させて頂きました。こんなに多人数の参加にも関わらず、温かく迎えて下さり本当にありがとうございます。同級生もみんな口々に参加して良かったと言っていました。僕も皆を誘って本当に良かったと思います。自分が吃音で悩み初めてST(言語聴覚士)の所へ相談しに行こうと思った時、吃音を診てくれるSTの少なさ、情報の少なさに驚きました。今回のこのつどいをきっかけに吃音を診てくれるSTが1人でも増えてくれればうれしいです。

〈午前中のミニコンサート〉

あんなに大勢の、それも初対面の方々の前で弾き語りすることはあまりなく、とても緊張しました。しかし、自分が曲に込めたメッセージを少しでも人に伝えたい、どれくらい伝わるか試したいという気持ちで歌い、とても満足のいくコンサートになりました。

歌も吃音と近いものがあると僕は思っています。どんなに綺麗にスラスラ話しても、自分の気持ちが伝わるとは限らない。どもりながらも真剣に話した方が伝わることもあります。歌もただ上手いだけでは想いは伝わらない。どんなに下手糞でも音痴でも、真剣に伝えようという気持ちで歌うことが大事だと思いながらも歌っています。これが僕が歌を続けている原動力になっています。

〈午後の話し合い〉

親御さんグループになりました。STの卵として、何か親御さんの力になりたいと思い意気込んで行きましたが、実際は知識の浅い自分には専門的なことでは力になれませんでした。結局、吃音をもつ等身大の自分しか表現できませんでした。しかし、今思えばこの等身大の自分、吃音をもつ自分こそが親御さん達の力になったのかなと感じました。いつかSTとしての自分と、吃音をもつ自分の二つの自分が参加者の方々の力になれるよう頑張りたいと思います。

今回、約3年振りにつどいに参加しました。3年前、僕はSTの養成校に行くなんて全く考えておらず、STの先生に紹介されたから参加した、ただの大学生でした。3年振りに参加したつどいは、あの時とメンバーも変わり色んなところが変わったのかな？とも感じました。しかし、実際は3年間に感じた居心地の良さは何も変わらず、つどいが終わった後の満足感は3年前と同じものでした。最後の感想でも言いましたが、自分が小中高生の時にこのつどいに出会っていたら自分の人生は変わっていたのかなと思います。しかし悩んで苦しんだ過去の自分がある今の今です。その時の自分が居なかったら今、STを目指していないかもしれません。過去の自分を否定せずに生きて行こうと、このつどいで思いました。本当にありがとうございました。皆様お疲れ様でした。

Let it go! ありのままで 映画紹介

Y.T さん (広島在住)

次男は中2になりました。これまで、吃音の話に向けても、はぐらかされることが多かったのですが、この頃は親子で色々な話をするようになりました。話をしていると、吃音について、思い込みや疑問が多いことも分かってきました。“悩みの相談”ではなく、ソファに寝転がったまま、世間話の一つとして吃音の話をし

ています。「脳にも原因があるんなら、こんな方法どうかね？〇〇〇」(次男)←ツッコミどころ満載。「吃音学会に行った時に、おもしろい発表があって、それはね、〇〇〇、これってあり？」(私)と盛り上がったり。「なおす方法を考えるのもいいけど、“吃音はぶり返すことがある”って頭に入れとかなないと、気持ちしがしんどくなるかも」と言い添えたりしています。

もちろん、息子が本音を全て言えているとは思いませんが、日頃からお互いの考え方を知っておくことに、心地良さを感じています。吃音の症状だけでなく“氷山の水面下の部分”に向き合うことで、前向きに(?)悩める思春期を送ってもらいたいと願っています。

話は変わりますが、先日、映画「アナと雪の女王」を観ました。この映画のストーリーは、吃音のこ」と重なりました(つい重ねて観てしまいます)。何でも氷に変えてしまう手をもつエルサは、両親に「そのうちに手の魔法は消える」と根拠なく言われ、隠すことを強いられて、人前に出してもらえない。その「手」を他人に知られることを恐れるエルサの気持ち。両親が亡くなっても悩みは解決せず、周囲を信じられない時に「手」は余計に「悪く」作用してしまう。他人に知られることとなった時、その場から逃げ出して、遠く離れた山奥に一人で住み「自由になれた」と思ってしまう。(この「レリゴー♪」の部分は、私にはとても切なく思えました。)その後、妹のアナらの愛や支え、周囲の理解で、「手」はそれまでと何も変わらないのだけど、街に住む人々にも、本人にとっても、それは心やすらぐ癒やしとなっていく…。エルサの心の動きが、すごく伝わってきました。

本人も周囲も“一部分”を捨てようとする(させる)のではなく、“部分”より“全体”を受け入れられること、そして“頭”でなく“心”で、本人がそう感じられることが大切なのだろうなあと思いました。(吃音のアングルからの勝手な映画考でした。)

私や息子にとって、“心”で感じるための大切な場所の一つが、何度か参加させて頂いた中高校生のつどいです。私の住む広島で開催している「きつおん親子カフェ」も、そうあればいいなと願っています。

スタッフ勉強会「インタビューゲーム」

「私の悩み、分かってくれる？」 インタビュアー：山口直明貴(スタッフ、中学生G担当)

私は嶋田聖子です。声が低く、男性のような声である事が、大きなコンプレックスです。生まれつき声が低く、幼稚園ぐらいから、周りの人から指摘されるようになりました。周りからアルトと言われることもあり、現在も克服できていない問題です。この声で支障をきたす事といえば、バイト応募をする際に、男性と間違われ、応募できないと言われたことがあります。そのバイト先には、「女性ですけど!!」と訂正したことで、無事、働かせていただく事になりましたが、とても傷付いた思いがあります。声に関する最近の嫌な思いは、声のモノマネをみんながしてくる事です。嫌だけど、嫌とは言えなくて、インタビューゲームでの前に観た吃音がある子供達が、はっきりと嫌と言っているのを観て、すごいと感じたのと、私と同じなんだと共感しました。国リハのみんなには、もう私の声のモノマネをして欲しくないの、次モノマネされた時には、勇気を振り絞って一度くらい嫌なんだという事を伝えてみたいと思いました。自分の声で、良い思いをする事は少ないけど、「その声好きだよ」と良いことを言われても、特に何の感情も起こらないところが不思議なところなんです。STを目指すようになり、自分の声がどうなのかと心配な面もあります。

見た目が背が高く、男性の様なところがあるので、この低い声で良かったんじゃないかと思う時もあります。私が高い声でキャピキャピしていたら可笑的でしょう？でも最近、言われて気づいたことがあります。実は私、中身はさばさば系ではなく、ちょっとした事も気になったり、周りに気遣いができる女性的な部分があるんです。もしかしたら、声が低かったり、背が高いから、男性の様に振る舞わなくてはいけないと思っていて、

それが性格として表れてしまったのかもしれないね。

^{しょうこ}
嶋田 聖子(国立リハ学院 言語聴覚学科1年、スタッフ 中学生 G 担当)

初めは内心、かなりびくびくしていました。事前に、『ただ、そばにいる(北川敬一氏)』の DVD を観た時、吃音の子供達の話に、自分の声のコンプレックスとも似たところがあるなあ、と思ったことがあったのですが、そこはきっと違うんだろう、同じと思ってはいけなのだろう、と考えていました。「それわかる!」は場合によって、残酷なことばだと思うからです。

しかし、ついに、インタビューゲームで、自分のことを話す機会がありました。案外ぺらぺらと、話しました。その場では少し後悔しました。でも、自分の弱みをさらさずに人の話を聞くのはずるいと思っていたので、その意味で少し気持ちに整理がついたことと、その経験は中学生の話を聞く上でも武器になると言っていたことで、やっと、自分が参加していてもいいのかもしれない、と思えるようになりました。

音楽は、とても、楽しかったです。なかなか大人数で歌う機会はありませんし、まして、チューバを吹く機会をいただけたとは思ってもよらず、うれしかったです。

後記 ふつうにどもりながら、ふつうに生きているスタッフの姿を見て欲しい。自分達の人生を大切にしつつ自分らしい素敵な人生を送っている。Let it go つっかえながらでいい。どもりを治さなきゃ…ではなく、どもることをむしろ大切にしつつ…でしょうか。そんなスタッフのふつうの姿を見ていただきたい。「アナと雪の女王」、気持ちよく歌えました。余談ですが、つどいの方がよくどもる。お母さんの前の方がよくどもる…という話お聞きました。それはより自分の素を出し得る場所だから。スティグマ刷り込まれた頭よりも、どもりたがっているからだの方が正直で賢い。自らのからだの声にちゃんと耳を傾けてあげることです。コントロールせず伸び伸びどもれることの清々しさよ。(代表 佐藤隆治)

